慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	丘の上の地球座 : 初期アメリカ・ピューリタンの説教と世界劇場
Sub Title	The globe upon a hill : Theatrum Mundi in the early American Puritan sermons
Author	常山, 菜穂子(Tsuneyama, Nahoko)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1998
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.75, (1998. 12) ,p.348(33)- 369(12)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	山本晶教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00750001-0369

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

丘の上の地球座
——初期アメリカ・ピューリタンの説教と世界劇場

常山　菜穂子

All the world's a stage,
And all the men and women merely players
(*As You Like It* 2.7.139-40) (1)

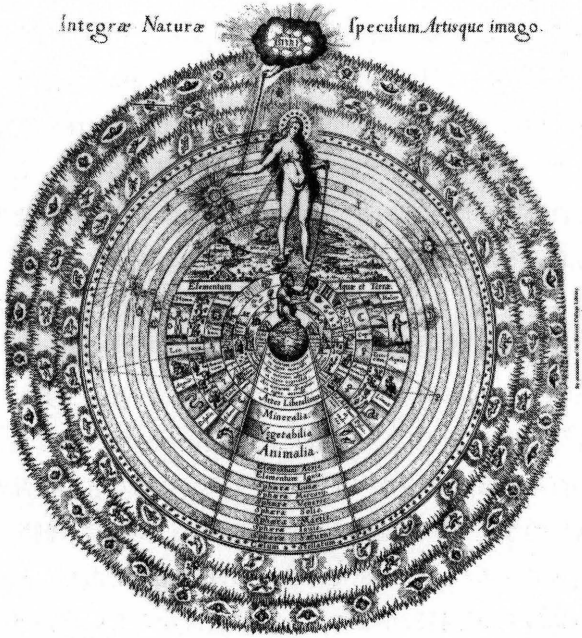
これはShakespeareの*As You Like It*におけるJaquesの台詞としてあまりにも有名だが，「世界は劇場，人は役者」とみるいわゆる「世界劇場（テアトラム・ムンディ）」の隠喩自体は古くからあった。その起源は古代ギリシャのピタゴラスもしくはローマのペトロニウスまでさかのぼり，中世を経てルネサンス期に再び注目を浴び，16世紀には一般に広く受け入れられていた。概念そのものはシェイクスピア特有のものではなかったのである。よって本稿で注目するのは，たとえば1599年グローブ座においてこけら落とし公演のひとつとして『お気に召すまま』が上演されて，観客がジェークィーズの台詞を耳にする——この時空がいかなる構造によって世界劇場を内包しえたのか，という問題である。

旅籠の中庭に作られた仮説舞台や熊いじめの円形競技場あるいはVitruviusの『建築書』(2)など，エリザベス朝時代の公衆劇場の起源には諸説ある。しかしその起源がいかなるものであれ，1599年にBurbage兄弟らとともにテームズ南畔にグローブ座を建設するにあたり，シェイクスピアが世界劇場の概念を強く意識していたことは確かである。まさしく「地球（グローブ）」と名づけられたこの劇場の入り口には，地球を背負うヘラクレスの絵と「全世界が劇を演じる」'Totus mundus agit histrionem'の文字が掲げられていたという。舞台では『お気に召すまま』に限らず，筋立ては異なる物語で，この主題が幾度となく繰り返し唱えられた。たとえば，気

の狂った Lear は“When we are born, we cry that we are come / To this great stage of fools.”(4.6.182-83) と喝破し，Macbeth は王妃の死を知らされて人生のはかなさを思い述懐する。

Life's but a walking shadow, a poor player,
That struts and frets his hour upon the stage,
And then is heard no more. (5.5.24-26)

人は世界という舞台で決められた役柄を演じる役者である。その舞台を見守るのは天上の観客と想定されていた。地球は宇宙の中心にあり，その宇宙全体は神の支配下にあると考える天動説はプトレマイオス以降1400年間信じられており，コペルニクスが地動説を発表してから50年余を経たシェイクスピアの時代でもいまだ根強く残っていた。図は Robert Fludd による *Utriusque Cosmi Historia* (1617-19) に掲載された，当時の世界観を反映する代表的なプトレマイオス的宇宙図である。多重円の中心には地球が位置し，外円は天を意味する。地球上に座る猿は自然を「猿まねする」人



間の姿を表しており，それを取り囲む神と天使の層はまるで「猿芝居」を見物しているかのようである。この感覚はまさしく，*Measure for Measure* でIsabellaが兄に対する無慈悲な判決を責める台詞と呼応する。

. . . but man, proud man,
Dress'd in a little brief authority,
Most ignorant of what he's most assur'd
(High glassy essence), like an angry ape
Plays such fantastic tricks before high heaven
As makes the angels weep . . . (2.2.117-122)

ほかにも，Coriolanusは母を責めて"What have you done? Behold, the heavens do ope, / The gods look down, and this unnatural scene / They laugh at." (5.3.182-85) と嘆いている。

さらには舞台で演じられる隠喩は，その舞台を見つめる観客へとはね返る。世界がひとつの劇場であり人がひとりの役者であるならば，本物の劇場と本物の役者は現実世界を映し出す鏡となり，世界の縮図となる。エリザベス朝時代の公衆劇場では，プトレマイオス的宇宙図が描かれた舞台の天井を「天(ヘヴン)」と呼び，反対に奈落は「地獄(ヘル)」と称した。その「天」と「地獄」に挟まれた舞台は「現世」を表していた。「地球」という名の劇場でジェークィーズやリア，マクベスの台詞を聞く観客は，舞台上の人物同様に自分自身もまた，世界という劇場で演技する役者のひとりなのだと意識せざるをえなかったに違いない。円形劇場の舞台で役者が「この世はすべて舞台」と盛んに唱え，観客が人生の演劇性に思いを馳せる時，シェイクスピアのグローブ座は多重の世界劇場を提示する。

こうしたグローブ座の精神構造は，17世紀初め，植民と共にアメリカへと移入されて変容を遂げる。新大陸に演劇文化が根づくのは遅く，植民地時代最初の百年では英語やスペイン語，フランス語などの小品が上演されたという断片的な記録が散見されるだけである。初の常設劇場がヴァージニアのウィリアムズバーグに建てられるのは1716年であり，しかもシェイクスピア作品の上演は1737年まで待たなければならない。17世紀アメリカ

には劇団も劇場の建物もなかった。ところが，1716年よりずっと以前に，すでにアメリカには別の意味で「劇場」があったのである。ピューリタンの父祖たちは説教壇を作り，世界劇場の主題を唱えた。その前に集う会衆は，グローブ座の観客と同じように，自分たちはアメリカという舞台で神の台本を演じる役者だと自覚していた。してみれば，この初期ピューリタンの説教の場に，グローブ座が包有した場の隠喩的な再建を仮定することができるのではないか。

1．言葉による劇場

ハートフォードの牧師 Thomas Hooker (1586?-1647) が説教 "The Soul's Vocation or Effectual Calling to Christ" (1637-38) で "The word of the Gospel and the work of the Spirit always go together" (82) と述べるように，回心というピューリタンの信仰生活においてもっとも大切な体験は神の恩恵によってもたらされ，その聖霊のはたらきは福音の言葉を通じて行われると考えられていた。ゆえに説教はことさら重要な役割を担っていた。". . . the Lord hath ordained and set apart the preaching of the word, he hath sanctified it , and set it apart to call the soul. [. . .] So it is with the Gospel, there is no other usual means to call the soul. . . ." (82-83) すべての真理は聖書に記されており，聖書の言葉を平明に語ることこそ肝要であった。そのためカトリックや国教会の過剰な儀式性に反発し，聖像や聖画，聖歌，祭服といった装飾品はことごとく否定されたのである。偶像破壊を唱えることで他宗派との差別化を図り，ピューリタニズム確立を標榜する政治的動機もあった。

一方ピューリタンの偶像否定の根幹には，人間の想像力 imagination に対する強い不信が窺える。(Miller *Seventeenth Century* 246-48, 256-59 ; Elliott *History* 226-29 ; Tichi 87-91) 想像力は "sense-images" を "synthetic phantasms that corresponded to nothing in nature" (Miller *Seventeenth Century* 246) へと変える。こうして生み出されたイメージはしばしば理性を飛び越して意志や感情に直に働きかけ，人を悪へと導い

てしまう。しかも悪魔は実体験では得られないような悪のイメージを想像力に植えつけて，人を誘惑すると考えられた。Jonathan Edwards (1703-58) は修正カルヴァン主義の神学書 *Religious Affections* (1746) において，想像力を"the devil's grand lurking place, the very nest of foul and delusive spirits" (288) と呼ぶ。想像力そのものが悪いわけではないが，それは理性あるいは神によって制御されていなければならず，イメージは現実のみを映すものでなければならないのである。

> Because imagination is the "first wheel of the soul," it must be rigorously controlled by the reason, and if reason is incapable, then by the Word and by the spirit. Fancy is not in itself sinful, and it is necessary in the religious life to form phantasms of the truths of religion, but it must mirror only facts. (Miller *Seventeenth Century* 259)

ゆえに人工の創造物が受け入れられる余地はなかった。マサチューセッツ湾植民地初代総督 John Winthrop (1588-1649) は1645年に，創作文学を批判している。

> . . . a godly young woman, and of special parts, who was fallen into a sad infirmity, the loss of her understanding, and reason, which had been growing upon her divers years, by occasion of her giving herself wholly to reading and writing, and written many books. (*Journal* 2 : 225)

だとすればピューリタンの攻撃の矛先が，想像的かつ人工的な表象芸術である演劇に向けられたのも当然と言えよう。ピューリタンの演劇嫌いはイギリスにおいて中世劇の伝統を終わらせ，1642年には劇場封鎖をもたらしたが，新大陸ではその感情はより一層強かった。本国イギリスの文化だからという単純な反発心もあったであろうが，もとより新大陸に共同体を作る際に娯楽に興じる経済的・精神的余裕はあったはずもない。脆弱な政治組織にとっては演劇の持つプロパガンダ機能も脅威となる。政治家 Samuel Sewall (1652-1730) は政治の場であるタウンハウスで劇が上演

されることを恐れている。

> There is a Rumor, as if some designed to have a Play acted in the Council Chamber, next Monday. . . to turn their Senate-House into a Play-House. . . . Let it not be abused with Dances, or other Scenical divertisements. . . . (1714, quoted in Meserve 27)

演劇に対する危機感は繰り返し表明された。ボストンの有力牧師 Cotton Mather (1663-1728) も善行論 *Bonifacius* (1710) において，"*Devils Library*"の例として演劇を挙げつつ，両親は子供に良書を与えるよう心がけよと提言する。

> I will then assign them [children] such *Books* to *Read*, as I may judge most agreeable and profitable; obliging them to give me some Account of what they Read; but keep a Strict Eye upon them, that they don't Stumble on *the Devils Library,* and poison themselves with foolish *Romances*, or *Novels*, or *Playes*, or *Songs,* or *Fests that are not convenient.* (58)

神学生に宛てた指導書 *Manuductio ad Ministerium* (1726) に収められた文学論"Of Poetry and Style"では，演劇を"frogs out of the mouth of the dragon, and of the beast"にたとえて"touch them not, taste them not, handle them not" (687) と諭す。実際のところ演劇を法的に規制する動きは植民当初からあり，18世紀には南部のヴァージニアとメリーランドを除くすべての植民地で演劇禁止令が制定されたほどである。(Meserve 27-30; Bryan)

このような厳格な偶像否定ゆえに，ピューリタンはしばしば不毛な文化の代名詞のように論じられるが，Norman Grabo の指摘を待つまでもなく，彼らといえども普遍的な芸術的模倣(ミメシス)への欲求はあわせ持っていたはずである。神の像を作ることはできないが，目に見えない神を視覚化したい，抽象的な神学概念を具体化したいとの想いは，おのずと彼らを言葉による芸術へと向かわせることになった。

> But the Puritans found means to satisfy the universal craving for

well-wrought mimesis. Having outlawed the satisfactions of High-church ritual (a form of both dance and drama), and fearful of the magnetic attraction of icons for idolatry, they turned to literature. (Grabo 499)

結果的にピューリタンは自伝・伝記に始まり歴史，旅行記，教訓話，詩歌，回心体験記や捕囚体験記などのほかにも，公表を意図せずして書かれたおびただしい数の日記や書簡を残した。神の視覚的な像を作れないのならば，言語による像を作れば良いのである。

こうした試みのうち，もっとも有効だったものが説教であった。David D. Hallによれば，当時は「書くこと」と「話すこと」の格付けは同等で，むしろ聖書は音読される機会の方が多いほどの音声文化だったという。(42) 安息日の礼拝や平日に開かれた講義といった日常的な場のほかにも，選挙や政治家の任命式，葬式，死刑などさまざまな機会をとらえては説教がなされた。一般の信者は一生のうちで約七千回，時間にして一万五千時間の説教を聞いたという。(Daniels 80) しかもその多くは時をおかずして印刷・出版され，人びとは家庭でも説教を学ぶことができた。ピューリタンは模倣(ミメシス)への欲求不満を解消するために，言語による芸術を奨励して説教の伝統を築いた。しかもここで注目すべきは，その説教が，ピューリタンがもっとも嫌悪したはずの演劇を彷彿とさせる要素を孕んでいた点である。

2．説教壇という舞台

17世紀から説教壇を舞台にたとえる言い回しはよく使われていた。Hookerは“The Application of Redemption” (1657) において，“What! A Minister a Jester! O fearful! to make the Pulpit a Stage, to play with sin. . .” (211) と派手な弁論術を使った説教を批判する。説教壇の上で牧師は表情豊かに身振りを交えて語り，聴衆への呼びかけや直接話法，対話体を盛んに取り入れた。たとえばSamuel Danforth (1626-74) は選挙日の説教“Errand into the Wilderness” (1670) の最終部分 (72-77) におい

て，悲観主義的な皮肉屋の役を作り出し，声色を変えて二役を演じている。架空の対話は，難解な思想を理解する手助けにもなる有効な技法であった。このような牧師の熱演が聴衆を魅了したのも当然と言えよう。

説教を聞くことは神の恩恵を知る手段であり，ピューリタンは厳格な安息日厳守主義に従った。安息日には9時と14時の礼拝に出席し，聖書を読んだり黙想したり慈善活動をしたりするといった宗教的行動以外の活動はすべて禁じられていた。安息日を破ることは死罪をも含む厳罰に値した。(Solberg passim) しかもマサチューセッツやニュー・ヘヴン，コネチカットなどの共同体では，説教への出席が法で定められていた。(Morgan 123) ところが信者が説教に出席したのは，必ずしも強制されたからという理由にとどまるものではない。Bruce Daniels は礼拝や聖職按手式，葬儀，教会の祝日などが厳格な宗教的行事であると同時に，娯楽を提供する機会でもあったと論じる。(75-92) なによりもまず安息日は，日々の過酷な仕事から解放される休暇である。日頃は離れて暮らす親戚や友人が遠方から来て一同に会する楽しい社交の場でもある。説教は宗教的な主題以外にも科学や医学の話題を提供する知的興奮の手段であり，政治や事件について語るメディアでもあった。また説教には，聖書と同じように具体的で生々しいイメージや逸話，たとえ話，誇張などが溢れていた。

> Puritan authors also published stories of bizarre occurences in nature that would have made latter-day showman like P. T. Barnum envious: two-headed cows, twenty-five-pound babies, storms that blew boulders miles in the air. (Daniels 32)

説教は19世紀の天才興行師 P. T. バーナムが繰り広げたような見世物(スペクタクル)と同じ楽しみをすでにもたらしていたのであり，この点で17世紀の「聴衆(オーディエンス)」はまさしく「観客(オーディエンス)」なのであった。

ピューリタンは演劇を宗教を脅かす存在として捉えていた。Cotton Mather の父 Increase Mather は“A Dicourse Concerning Faith and Fervency in Prayer”(1710) で，宗教を物笑いの種にした古代劇がニューイングランドに復活することを危惧する。

> One of the most woful things that ever was in the World has been the Scandalous contentions which have been among Christians. They were for this derided by the Heaven, who would on that account expose them on their Publick Theaters, and Ridicule them in their impious Stage Playes. And has it been better in these Latter Ages? (55-56)

しかし牧師たちは演劇を禁止する一方で，説教のかたちで演劇を繰り広げていた。演劇を非難する説教そのものが多分に演劇的要素を有していたからである。図らずもピューリタンは，説教という言語による劇場を作ったのだった。

3．レトリックの世界劇場

ここで説教の内容に目を転じれば，そもそも新大陸への移住そのものが，予型論(タイポロジー)的レトリックによってひとつの世界劇場として読み替えられていた事実が浮かび上がる。17世紀初頭に入植したピューリタンは，みずからを旧約聖書のイスラエル人に重ね合わせる歴史観を展開する。移住を「荒野への使命」と称して，エジプト脱出から荒野の放浪，カナンへの定住へと至る過程になぞらえた。ピューリタンは「出エジプト記」にみたてた台本をアメリカなる舞台で再演する役者となる。かくてニューイングランドの地において，ピューリタンは神との契約による共同体の建設を目指した。マサチューセッツ湾植民地設立の立て役者 Winthrop は，アメリカ上陸直前に行ったかの有名な説教"A Model of Christian Charity"(1630)で[3]，"Thus stands the cause between God and us. We are entered into covenant with him for this work."(90) と契約関係を明言している。神は人に救済の恩寵を与え，その代わりに人は信仰に基づく神の国"a city upon a hill"(91) を築く義務を負う。人が演じるべき役柄は神意によって定められている。

しかも契約とは双務関係であるから，もし人が約束を破れば神は容赦なく罰を下す。

> But if we shall neglect the observation of these articles which are the ends we have propounded and, dissembling with our God, . . . the Lord will surely break out in wrath against us, be revenged of such a perjured people, and make us know the price of the breach of such a covenant. (Winthrop "Model" 90-91) [4]

そのため，ピューリタンは常に神に「見られている」と思う一種の脅迫観念を抱くようになった。Cotton Mather は日記にこう記している。

> My mind with all the Dispositions, and all the Operations of it, is continually under the Eye of the omnipresent God. Not only my Wayes, and my Words, but also the Thoughts and Frames of my Mind, come under the Observation of the glorious One. (*Diary* 2 : 155)

"my Wayes, and my Words"のみならず"the Thoughts and Frames of my Mind"までも神が見張っているというこの感覚は，説教にも頻出する。Increase Mather の"David Serving His Generation"(1698) はその典型であった。

> Let us always remember what Eyes are upon us. There are glorious Eyes, which though we see not them, they are observing us in all our motions. The Eyes of holy Angels are upon us. 1Cor. 4.9. *We are made a Spectacle to Angels*. . . . [. . .] And the Eyes of Jesus Christ the Son of God behold us. . . . [. . .] God seeth thee, Angels are by thee, Thy own Conscience will be a witness how thou dost behave thy self. (26-27)

ここにおいて言うなれば，神は観客として立ち現れる。

他方アメリカへの植民をめぐるより世俗的な事情に着目すれば，ピューリタンの演じる世界劇場が必ずしも宗教的動機のみに裏打ちされたものではないことが分かる。観客は天上の神だけではなかった。

> For we must consider that we shall be as a city upon a hill. The eyes of all people are upon us, so that if we shall deal falsely with

> our God in this work we have undertaken, and so cause him to withdraw his present help from us, we shall be made story and a by-word through the world. (Winthrop "Model" 91)

Winthrop の説教が示すように，宗教闘争に敗れて追われるようにアメリカへやって来たピューリタンは，ともすれば単なる敗残者の汚名を着せられ，"by-word"とされてしまう。自己を正当化するためには，我こそは聖書の原型(アンチタイプ)であり，神の国を建設すべく神と契約をかわした選民であることを常に実践してみせなければならない。"eyes of all people"が注がれているからである。しかもマサチューセッツに限ってみるならば，プリマスに入植したピューリタンが国教会からの完全分離を掲げる分離派だったのに対して，マサチューセッツの人びとは非分離派と呼ばれる一派だった点も忘れてはならない。彼らは国教会の改革が可能だと信じ，改革された真の教会の姿を示そうとした。このモデルとしての自負が，見られている者の自意識を強めたとも言えよう。

さらにもっと身近にも見ている存在はあった。Cotton Mather が *Bonifacius* において指摘するように (85)，共同体では自分が神との契約を守っていても，構成員のうちひとりでも背く者があれば，全体が罰せられることになる。ゆえに人びとはお互いを監視していた。成人でも，独身者が一人暮らしを禁じられていたのはこのためである。Jane Kamensky は17世紀ニューイングランド社会では，人びとは他人の言葉に非常に敏感だったと指摘する。それは神の言葉としての聖書を唯一の拠り所とするピューリタンが言葉そのものを重視していたからとも，情報そのものに飢えていたからとも考えられるが (46-48)，なによりも未熟な閉鎖社会においては，みずからの名誉を守るためには他人の言葉に絶えず聞き耳をたてていなければならなかったことによる。(12)「見張り，見張られる」感覚が生まれたのも必然であった。宗教共同体にとってもっとも恐ろしいのは，背信を犯し神権制を脅かす異端者の存在である。神権制下にあっては，公民となるためには教会員であることが条件とされ，教会員となるためには牧師やほかの信者が見守る前で回心体験の告白を述べなければならなかっ

たのだが，これはまぎれもなく Foucault 的監視制度の一種にほかならない。

ピューリタンの説教は，神の書いた台本に従いキリスト者としての役柄を演じるように説いた。そうすることによって恩恵がもたらされ救済に至ることができるとみなされた。聴衆の側も固くそう信じていた。Jeffrey Richards による詳細な資料がすでに明らかにするように（101-73），アメリカを舞台に見立てる表現は当時から珍しくなく，むしろ親しみ深いものであった。植民地設立の先人たちを役者にたとえる Cotton Mather の歴史書 *Magnalia Christi Americana*（1702）の書き出しなどはあまりに有名だ。さらに言えば，人びとはこうした世界劇場観を説教によって植えつけられていたとも考えられる。神と世界とが見ているから信心深く生きよと説くことによって，若い組織をまとめ上げ，神権制を保持しようとした。説教の場はアメリカ固有の政治的要請に応えた劇場だったのである。

4．死刑の説教

初期アメリカ・ピューリタンの説教はあらゆる機会に行われ，その内容も多岐にわたるが，そのうちでも特に演劇性を有すると思われるのが死刑の説教である。死刑の説教は教会で鎖につながれた罪人を前にして，絞首刑の直前あるいはそれに先立つ水曜日か安息日に約一時間かけて行われた。1686年 3 月に行われた殺人犯 James Morgan の処刑では，処刑日の前の安息日に Cotton Mather と Joshua Moodey の二人が，当日には Increase Mather の合計 3 人がそれぞれ説教をしている。（Bosco 159-60）説教が終わると，時には罪人が入ることになる棺と共に，牧師と罪人は処刑台のある広場へ向かう。説教と処刑は大変人気が高く，[5] 何日もかけて遠方からわざわざやってくる者もいた。説教には550から850（Minnick 79），処刑には3000から6000もの人が集まったという。（Williams 831）[6] これは教会の収容定員をはるかに上回る人数である。Cotton Mather は別の死刑の時は，説教壇にたどり着くのに“*Pues and Heads*”を越えて行かなければならなかったと日記に記している。（1：279）興奮した観衆は，

処刑台に向かう行列で少しでも罪人に近づこうとした。(Minnick 79) 罪人の生い立ちや犯罪の様子が詳しく書かれたパンフレットが売られたりもした。処罰やその説教がいかにニューイングランドの人びとの見世物的好奇心をあおり立てたかは，Nathaniel Hawthorne の *The Scarlet Letter* (1850) 冒頭において姦通を犯した Hester が獄舎から引き出されさらし刑に処せられる様子，あるいは Arthur Miller の現代劇 *The Crucible* (1953) における魔女裁判の様子から窺い知ることができる。

死刑の説教の構成は同時代のほかの説教と大差はない。まず聖書からの引用とそこから引き出される原理 doctrine が示され，応用 application の部分において，その原理が実際のニューイングランドの状況——死刑の説教の場合は実際の犯罪と罪人——に当てはめられる。罪が弾劾され，死刑の宣告とその正当化が行われる。さらに罪の告白と懺悔が勧告され，もし回心すれば天国への道が開かれることが告げられるのだ。ここでも神の視線が強調される。前述の James Morgan の死刑に際して Moodey が行った説教 "An Exhortation to a Condemned Malefactor"は，". . . Besides all the other Evils that your own heart is privy to, and many more which the All-seeing God hath observed in you" (62) を悔い改めよと諭す。Danforth が"The Cry of Sodom" (1674) で"The Lord is every-where present. . . . The Lord seeth the most secret wickedness, and knoweth our thoughts afar off, and needeth not to make any search or enquiry. . . ." (2) と言うように，神は常にひとの罪を「見ている」のである。

死刑の説教で特徴的なのは，死刑に処せられる罪人の罪とその末路とが共同体全体の運命と重ね合わされる点にある。殺人や強盗，同性愛などの犯罪が存在すること自体，その共同体が神との契約を忘れつつある証拠なのである。説教を聴く人びとも罪人となんら変わらず，罪を犯さないで済んでいるのはたまたま神の恩恵があるからに過ぎない。Increase Mather は，主人を殺害した二人の召使いに対する"The Wicked Mans Portion" (1674) においてこう述べる。

Have we been kept from the like evils that others have been

guilty of? No thanks to our own hearts, for wee have the same nature that they have, and if God had given us up to our own hearts lusts, wee should have been as bad as they, or as any of the children of men, that ever were in the world. (16)

説教が実際の殺害方法など犯罪の詳しい経緯には触れずに罪の普遍化を図るのも（Halttunen 75-76），罪人と聴衆が"the same nature"を持つことを強調するためだろう。幼児殺しの黒人に対する説教"The Player and Plea for David"(1751) で Mather Byles が言うように，人類最初の殺人者アベルの血"the Blood of Abel"に象徴される一個人の罪を弾劾するのではなく，キリストが十字架上で流した血"the Blood of Sprinkling" (quoted in Halttunen 76) にこそ目を向けて，全員が原罪を悔い改めなければならないのである。死刑の説教は罪そのものを問題とするのではなく，むしろ罪を犯した罪人がいかに懺悔に至ったのか，その過程を中心に述べた。罪を悔い改め天へと召される罪人の姿は，人びとが従うべきモデルである。人間は原罪を負うが神の恩恵によって回心すれば救済されるというピューリタンの教えを，人びとはまず死刑の説教から，ついで実際に目の前に立つ罪人から学ぶ。John Rogers が記した幼児殺人犯 Esther Rogers に関する犯罪体験記（クリミナル・ナラティヴ）*Death the Certain Wages of Sin* (1701) の言葉を借りるならば，死刑にみる"a Tragick Scene"は神の恩恵を示す"a Theater of Mercy" (118) へと変貌する。説教と処刑に集まった観衆は，神のまなざしを思い出し，神との契約を再確認せずにはいられない。

死刑の説教と処刑は，罪を犯した者が回心しキリスト者として立派に死んでいく姿を示す。しかしこの一連の行事が，神権制共同体の強化を図る牧師によって巧妙に計画されたものであったことはもはや明白である。牧師は獄中の罪人を頻繁に訪れては，どうすれば回心に至ることができるか熱心に説いたという。(Williams 832-35) その目的は，回心者とはどのような態度を取り，どのような告白の言葉を言うべきものかを教え込むためだったとも解釈できる。罪人は処刑に集まった観衆の前で，罪の告白と懺悔の言葉を言うことを求められたが，この最後の演説でさえ多くの場合そ

の台本は牧師の手によって書かれ，しばしば牧師自身が代読した。(846, note25) Nathaniel Clap の説教"The Lords Voice, Crying to His People"(1715) が示すように，罪人は役者であり，その役柄は罪の告白によって神の恩恵のすばらしさを表現することにある。

> . . . if God hath, in his Holy Providence, brought Sinners out upon the Stage of the World, to make them to be Examples unto others, then it is their Duty to Grolify God before the World, by confessing of these their more Secret Sins. . . that others may be warned. . . . (quoted in Williams 834)

そして牧師は説教を行う役者でもあり，罪人に演技指導を与える演出家でもあった。説教壇あるいは処刑台という舞台で，牧師と罪人という役者が，人生の劇場において神が書いた台本に従わなかった者の運命を演じる。集まった観客が罪人と自分とを重ね合わせて「憐憫」pity を抱き，刑の執行なる末路を見て「恐れ」fear を感じていたとすれば，死刑の説教と処刑はまさにアリストテレスが唱えた劇的カタルシスをもたらす「悲劇」にほかならなかった。

5．丘の上の地球座

『お気に召すまま』と共に，グローブ座こけら落とし公演のひとつとして初演されたと言われる *Henry V* のプロローグにおいて，説明役は次のような口上を述べる。

> Or may we cram
> Within this wooden O the very casques
> That did affright the air at Agincourt?
> O, pardon! since a crooked figure may
> Attest in little place a million,
> And let us, ciphers to this great accompt,
> On your imaginary forces work. (Prologue 12-18)

粗末な舞台上に英仏両大国にまたがる壮大な物語を再現するには，役者の

力だけでは到底及ばない。だから観客は「想像力」"imaginary forces"を働かせて，足らざるところを補って欲しいと頼むのである。

グローブ座の時空は想像力によって成立する。引用にある"wooden O"の"O"（オー）という記号に注目しよう。"O"はその形状から「あらゆる丸いもの」を表す。*Love's Labor's Lost* では"O that your face were not so full of O's!" (5.2.45) と「天然痘のあばた」の意味で使われる。*A Midsummer Night's Dream* では Lysander が Helena を"Fair Helena! who more engilds the night / Than all yon fiery oes and eyes of light." (3.2.187-88) と称えるが，この"oes"は「星」を指す。語形から考えれば「木造のO字型」"wooden O"の"O"は「円形劇場」，すなわちこの劇『ヘンリー5世』が上演されようとしている「グローブ座」である。さらに世界劇場の観点を導入すれば，この"O"は「地球」でもある。*Antony and Cleopatra* におけるクレオパトラがアントニーを賞賛する台詞"His face was as the heav'ns, and therein stuck / A sun and moon, which kept their course, and lighted / The little O, th' earth."(5.2.79-81) では，"O"は「地球」を指している。また"O"は，その形から「ゼロ」，そしてそこから派生して「無，あるいは取るに足らないもの」の意味でも使われる。たとえば，愚かにも娘に王権を譲り渡してしまった Lear のことを，道化は"...now thou art an / O without a figure. I am better than thou art now, I am / a Fool, thou art nothing." (1.4.192-94) と言い当てる。

一方でこの"O"をレトリカルに解釈すれば，"O"は確かに「無」であるが，同時に「有」を生み出す力を持つ。説明役が述べる通り，"a crooked figure"すなわち「0（ゼロ）」は，数字の末尾につけば"a million"をも表すことができるからである。ここで思い出されるのが，頓呼法（とんこ）apostrophe として使われた際に"O"が発揮する行為遂行的言語（パフォーマティブ）としての効力である。頓呼法とは，文の途中でその場にいない人または擬人化したものに呼びかける技法で，しばしば"O"という呼びかけで始まる。この不在者や生命を持たない物体に呼びかける行為は，いない人がいることを，無生物に感情があることを想像して初めて成り立ち，呼びかけられた

側が“responsive forces”（Culler 139）であることを前提とする。この呼びかけは伝統的なシニフィアンとシニフィエの関係を解体する。呼びかけは，呼びかけられた側を“empirical time”ではなく“discursive time”（150）に位置づけることによって，“a fictive, discursive event”（153）たらしめる。頓呼法の“O”は，想像力によって不在者を存在せしめ，物体に生命を与える作用を持つのである。字義的には“wooden O”の“O”は「グローブ座」を指すが，それは「地球」でもある。しかも説明役が述べように，「無でありながら有をも生み出す数字のゼロ」でもあり，「頓呼法の“O”」をも想起させるのであった。「グローブ座」は「取るに足らないゼロのような」舞台だが，観客の想像力を借りることで，その何もない空間に歴史絵巻が作り出されるのである。

同じように，アメリカ・ピューリタンの牧師たちも偶像破壊を唱え想像力を否定するようでいて，その実その力を大いに利用していた。説教は行為遂行的言語（パフォーマティブ）によってひとつの劇世界を作り出し，聴衆の想像力に訴えかけて，それを信じ込ませたのである。マサチューセッツ湾植民地における選挙日の説教について論じるにあたり，批評家 A. W. Plumstead は説教壇をグローブ座にたとえている。

> The ‘desk’ in the old Town House or the State House of 1713 served as a theater, as New England’s “wooden O” where a priest dramatized — in soliloquy, but sometimes creating the voices of protagonist and antagonist, and in shifting tones and modes, history and prophecy, song and narrative — a great, epic story. (24)

こうした説教の背景には初期植民地時代のやむにやまれぬ事情があった。世界の僻地に追いやられたことを弁明するためには，選民思想にもとづく契約の理念を徹底させて，強固な共同体を少しでも早く築かなかければならない。神に与えられたキリスト者の役を忠実に演じよと説く説教は，神権政治のプロパガンダ劇でもあった。だとすれば，18世紀に入り，信仰心が衰退し神権制の弱体化が起きるのと時を同じくして本物の劇場が建てら

れ，本物の演劇文化が芽生えたのも単なる偶然とは言えまい。以上見てきたように，シェイクスピアのグローブ座を「人生は舞台，人は役者」という世界劇場観を作り出してそれを観客に伝授する場と捉えれば，その独特の変容型を初期アメリカ・ピューリタンの説教に見いだすことができる。新大陸においてピューリタンは，丘の上に「町」のみならず「グローブ座」をも建てたのである。

注

（1） 以下，シェイクスピア作品からの引用および行数はすべて *The Riverside Shakespeare* 第2版による。

（2） Frances Yates は，バーベッジ兄弟周辺の人間関係を分析することにより，グローブ座の設計がウィトゥルウィウスの『建築書』第5書にある古代ローマ劇場の平面図に触発されたのだと推量した。グローブ座に具現化された世界劇場観は古代ローマから継承されたものだと結論づけるイェイツ説は，ルネッサンス期に盛んだったこの世界観の根拠を説明するには確かに都合が良い。しかしながらこれを立証する確たる物的証拠はなく，玉泉八洲男氏など反論を呈する学者も多い。

（3） 当時は Winthrop のような民間人も説教をするのが常だったが，1636年に牧師以外の者による説教が禁止された。(Elliott *History* 193) これは Anne Hutchinson の自由神学を巡る Antinomian 論争の最中に，聖職者階級が言論統制を目論んだためであろう。

（4） この契約の理念は，予型論ともにピューリタン・レトリックの双璧をなす「エレミヤの嘆き」でも反復された。17世紀末，特に1670年代に盛んに行われた説教は，第二世代・第三世代の時代になり社会の世俗化とともに顕著になった宗教心の衰退を憂うもので，第一世代が遵守した神との契約の再強化を図る。Increase Mather は説教"A Call from Heaven" (1697) において，"So we may say, the first Generation of Christians in New-England, is in a manner gone off the stage, and there is another and more sinful Generation risen up in their stead." (61) と演劇の比喩を用いて嘆いている。しかし Sacvan Bercovitch によれば，ピューリタンは神の罰を神の愛の証しと考えて，常に救済を確信する楽観主義者でもあったという。(3-30; Miller *From Colony to Providence* 27-29)

（5） 多くの説教は後から印刷・出版され人気が高く，1936年から1729年までに出版された書物のうち約4割は説教が占めていた。特に死刑の説

教は，時には重版もなされるほど人びとに読まれた。(Minnick 80) その表紙にはセンセーショナルな文句やデザインが施され，罪人の投獄中の姿や告白，処刑の様子などの詳しい描写が付録としてつけられた。初めて印刷された死刑の説教は Samuel Danforth の "The Cry of Sodom" (1974) である。

(6) Minnick は処刑には12000もの人が集まったと推定している。(80)

Works Consulted

Austin, J. L. *How to Do Things with Words*. New York : Oxford UP, 1962. 『言語と行為』坂本百大訳，大修館書店，1978年。

Bercovitch, Sacvan. *The American Jeremiad*. Madison : Wisconsin UP, 1978.

Bosco, Ronald A. "Lectures at the Pillory : The Early American Execution Sermon." *American Quarterly* 30 (1978) : 156-76.

Bryan, George B. *American Theatrical Regulation 1607-1900 Conspectus and Texts*. Metuchen : Scarecrow, 1993.

Christian, Lynda G. *Theatrum Mundi : The History of an Idea*. New York : Garland, 1987.

Culler, Jonathan. "Apostrophe." *The Pursuit of Signs : Semiotics, Literature, Deconstruction*. London : Routledge & Kegan Paul, 1981. 135-54.

Danforth, Samuel. "Errand into the Wilderness." 1670. *The Wall and the Garden : Selected Massachusetts Election Sermons 1670-1775*. Ed. A. W. Plumstead. Minneapolis : Minnesota UP, 1968. 53-77.

---. "The Cry of Sodom." 1674. Facsimile rpt. *Execution Sermons*. New York : AMS, 1994.

Daniels, Bruce C. *Puritans at Play : Leisure and Recreation in Colonial New England*. New York : St. Martin's Griffin, 1995.

Edwards, Jonathan. *Religious Affections*. 1746. Ed. John E. Smith. New Haven : Yale UP, 1959.

Elliott, Emory. *Power and the Pulpit in Puritan New England*. Princeton: Princeton UP, 1975.

---. "New England Puritan Literature." *The Cambridge History of American Literature. Vol. 1*. Ed. Sacvan Bercovitch. Cambridge : Harvard UP, 1994. 169-306.

Grabo, Norman S. "The Veiled Vision : The Role of Aesthetics in Early American Intellectual History." *William and Mary Quarterly* 3rd Ser. 19 (1952) : 493-510.

Haims, Lynn. "The Face of God : Puritan Iconography in Early American Poetry, Sermons and Tombstone Carvings." *Early American Literature* 14 (1979) : 15-47.

Hall, David D. *Worlds of Wonder, Days of Judgment : Popular Religious Belief in Early New England.* New York : Alfred A. Knopf, 1989.

Hooker, Thomas. *The Application of Redemption.* 1657. Facsimile rpt. New York : Arno, 1972.

---. "The Soul's Vocation or Effectual Calling to Christ, Doctrine 3." 1637-38. *Salvation in New England : Selection from the Sermons of the First Preachers.* Ed. Phyllis M. Jones and Nicholas R. Jones. Austin : U of Texas P, 1977. 77-87.

Hulttunen, Karen. "Early American Murder Narrative." *The Power of Culture.* Ed. R. W. Fox et al. Chicago : Chicago UP, 1993. 67-101.

Kamensky, Jane. *Governing the Tongue : The Politics of Speech in Early New England.* New York : Oxford UP, 1997.

Levy, Babette. *Preaching in the First Half Century of New England History.* Hartford : American Society of Church History, 1945.

Mather, Cotton. *Bonifacius : An Essay. . .to Do Good.* 1710. Ed. Josephine K. Piercy. Gainesville : Scholar's Facsimiles & Reprints, 1967.

---. *Diary.* Ed. Worthington C. Cord. 2vols. 1912. New York : Ungar, n.d.

---. "Of Poetry and Style." 1726. *The Puritans: A Sourcebook of their Writings, Vol 2.* Ed. Perry Miller and Thomas H. Johnson. New York : Harper & Row, 1938. 684-689.

Mather, Increase. "A Call from Heaven." 1697. Facsimili rpt. *Increase Mather : Jeremiads. New York* : AMS, 1984.

---. "A Discourse concerning Faith and Fervency in Prayer." Boston, 1710.

---. "David Serving His Generations." 1698. Facsimili rpt. *Increase Mather : Jeremiads.* New York : AMS, 1984.

Meserve, Walter J. *An Emerging Entertainment : The Drama of the American People to 1828.* Bloomington : Indiana UP, 1977.

Miller, Perry. *The New England Mind : From Colony to Providence.* Cambridge : Oxford UP, 1953.

---. *The New England Mind : The Seventeenth Century.* 1938. Boston : Beacon, 1961.

Minnick, Wayne C. "The New England Execution Semon, 1639-1800." *Speech Monographs* 35 (1968) : 77-89.

Moodey, Joshua. "An Exhortation to a Condemned Malefactor." 1685.

Facsimile rpt. *Execution Semons.* New York : AMS, 1994.
Morgan, Edmund. *Visible Saints: The History of a Puritan Idea.* Ithaca : Cornell UP, 1963.
Plumstead, A. W. ed. *The Wall and the Garden : Selected Massachusetts Election Sermons 1670-1775.* Minneapolis : U of Minnesota P, 1968.
Richards, Jeffrey, H. *Theater Enough : American Culture and the Metaphor of the World Stage, 1607-1789.* Durham : Duke UP, 1991.
Rogers, John. *Death, the Certain Wages of Sin.* Boston, 1701.
Shakespeare, William. *The Riverside Shakespeare.* 2nd ed. Boston : Houghton Mifflin, 1997.
Solberg, Winton, V. *Redeem the Time: The Puritan Sabbath in Early America.* Cambridge : Harvard UP, 1977.
Stout, Harry S. *The New England Soul : Preaching and Religious Cultures in Colonial New England.* New York : Oxford UP, 1986.
Tichi, Cecilia. "Thespis and the 'Carnall Hipocrite' : A Puritan Motive for the Aversion to Drama." *Early American Literature* 4 (1969) : 86-103.
Williams, Daniel E. " 'Behold a Tragic Scene Strangely Changed into a Theatre of Mercy' : The Structure and Significance of Criminal Conversion Narratives in Early New England." *American Quarterly* 37 (1986) : 827-47.
Winthrop, John. "A Model of Christian Charity." 1630. *The Puritans in America : A Narrative Anthology.* Ed. Alan Heimert and Andrew Delbanco. Cambridge : Harvard UP, 1985. 81-92.
----. *Winthrop's Journal "History of New England" 1630-1649.* Ed. James Kendall Hosmer. 2vols. New York : Barns & Noble, 1966.
Yates, Frances A. *The Theatre of the World.* Chicago : Chicago UP, 1969. 『世界劇場』藤田実訳，晶文社，1978年。
Zakai, Avihu. "Theocracy in Massachusetts : The Puritan Universe of Sacred Imagination." *Studies in the Literary Imagination* 27.1 (1994) : 7-21.
安西徹雄『この世界という巨きな舞台——シェイクスピアのメタシアター』，筑摩書房，1988年。
大西直樹『ニューイングランドの宗教と社会』，彩流社，1997年。
蒲池美鶴「球体の変貌——「地球座」と地球の座」『文学』54：4（1986），27-38頁。
玉泉八州男『女王陛下の興行師たち』，芸立出版，1984年。
S・フェルマン『語る身体のスキャンダル』立川健二訳，勁草書房，1991年

［原書1980年］。
M・フーコー『監獄の誕生』田村俶訳，新潮社，1977年［原書1975年］。

※　本論文は文部省科学研究費補助金による研究成果の一部である。